

## 和歌山県名匠

# で ぐち じょう じ 出 口 讓 爾

### ■ 経歴及び業績

昭和9年海南市で生まれる。昭和27年「自分自身で思いきり出来る仕事」として家業である加飾業に入り、父の手ほどきを受ける。その後、昭和32年には京都在住の東端真祚氏に師事し5年間技術の研鑽に努める。

27歳で帰郷し、本格的な漆芸家として歩み始め、以降40余年、制作活動に精進している。

漆を塗った上に金銀粉または色粉などを蒔きつけて、器物の面に絵模様を表す日本独自の漆工美術である蒔絵は、緻密且つ精妙極まる独特の技術を要するものである。

氏は、その卓抜した技能により、現在、蒔絵業界の中で第一人者として活躍しており、その作品は、日展工芸部に7回、日本現代工芸美術展に7回、新日本工芸展に3回入賞するなど、全国的に高く評価されている。

一方で、明治中期に考察されたミカン漆器についても中嶋平吉氏に師事し、その技術を習得するなど漆器のデザインの改善向上にも努め、また昭和57年より6年間伝統工芸後継者育成事業の講師を務め後継者育成に尽力するなど、漆芸に対する深い情熱により伝統文化の継承に惜しまぬ努力を注いでいる。

昭和63年 伝統的工芸品産業振興協会より伝統工芸士に認定される。

平成8年 近畿通商産業局長より伝統的工芸品産業功労者等に対する局長表彰を受ける。



職 種 加飾（蒔絵）

